

Nami-Aru? / Internet

「Head Above Water(頭上の波)」

文:ジョージ・カックル

サーフィンというのは、誰にも教えられないし、教えてもらうことはできないと、僕は思う。未だサーフィンをやったことのない人にとっては、ハウツー本をいくら読んでもビデオを何本見ても、実際に波に乗るまでは、あの感覚は実感できないし、イメージすらつかめないだろう。運動神経がいいからといって、すぐにできるほどサーフィンはたやすくもない。

サーフィンでは、どんな大きい波でも、また小さい波でも、たとえ怖くても、波を乗り終わったときに笑顔になれば、それでいい。たとえ、洗濯機のなかにいるみたいにグルグルと巻かれて息が切れて、「ここで死ぬな!」と思うようなヘビーなワイプアウトをしたときでも、水面に顔を出した後に心から笑えれば、次がある。逆に笑ってられるようじゃなきゃ、その波は乗ってはいけない。

仕事でも恋愛でもそうだ。笑うことができないほど苦しくなったら、そこが自分の限度だと思ったほうがいい。何もすべてをクリアしなくてはならないわけではない。

とはいえ、サーファーにとってチューブに入ることはひとつの目標だ。やってみようと思うなら、方法はひとつしかない。実際、入って波に巻かれてみるしかないんだ。波のショルダーばかり乗っていてもいいけれど、自分がどこまでいけるのか、試してみるのもいい。

その昔、この話をニューヨークに住んでいる画家の友人に話したら、絵の世界も同じだといっていた。絵もリスクを恐れずに挑戦していかないと、新しいものは見えてこないらしい。でも、それには自分の歩幅でステップしていくことも大切だと。サーフィンもいきなり大波に乗れるわけではないが、自分をクリアしていけば、いつか違う自分になっている。たとえ怖くても、好奇心が恐怖心に勝ったとき、はじめてチャンスが訪れる。

そんなときは、波間に顔を出した自分の顔が笑っているはずだ。